

# アスリートのための キャリア・トランジション勉強会

Newsletter No. 17

2006年 10月6日

第17回

アスリートのためのキャリア・トランジション勉強会

## 【目次】

1. 「アスリートのキャリア・トランジション～スポーツを多角的に考える～」  
    ゲスト：樋口 潮（ひぐちうしお）氏 \_\_\_\_\_ 1
2. 第17回 アスリートのためのキャリア・トランジション勉強会  
    アンケート集計結果 \_\_\_\_\_ 14  
    2006年10月6日 勉強会参加者一覧 \_\_\_\_\_ 16
3. 次回勉強会スケジュール \_\_\_\_\_ 17

● 第17回勉強会報告書:

■テーマ■

アスリートのキャリア・トランジション～スポーツを多角的に考える～

■ゲスト■

樋口 潮 (ひぐち うしお)氏 筋肉ミュージカル総合プロデューサー

じつは、樋口さんをゲストにお呼びすることが現実になるとは思ってもいなかった。

私にとっては、雲の上の方であった。

加えて、大変お忙しい方で、ほぼスケジュールが空いていらっしやることなどないと思っ上げていたので、無理だと思っていた。

ただ、ダメもとでも、お伺いすることは失礼にはならないと思い、メールでゲストの依頼をさせていただいたら、ご快諾いただいた。奇跡と思った。

過去に数回、仕事の関係で、会食をさせていただくこともあった経緯から、少しは樋口さんのご経歴を伺っていたし、お会いするたびに、「ずいぶん熱い人だなあ、このエネルギーはどこから来るのだろう？」と、その人間的な「熱さ」、いや、「暑苦しさ」に感動していたのだが、あえて、今回、勉強会で、改めて色々伺い、大変、刺激的なお話を伺うことができた。

過去の勉強会は、16回あったが、この17回目にして、初めて、途中でお話を伺いながら、あまりに感動して、涙がこぼれてきてしまって、收拾がつかなくなり、共同主宰の重野氏に助けてもらったという失態をしてしまった。それくらい、感動して聞き入ってしまった。その感動が、報告書ではどこまで皆様にお伝えできるものか、、、難しいところであるが、下記、勉強会での樋口さんのお話の抜粋を記す。

以下、勉強会の抜粋:

(田中) それでは今日は、実はこのゲストで来ていただくことが現実になるとは、私、実は思っておりませんでした。大変カリスマ的な存在でいらっしやって、ほとんど直接お話すること自体が不可能とずっと思っていた方で、しかしながら最近本当に何回かお会いさせていただき、まさにキャリア・トランジションということに関しては、この方にお聞きするのはもう一番素晴らしいと。

まったくアスリートとも違う、コーチとも違う、いわゆるいろいろなスポンサーの企業さんともまた違うお考えを持っていらっしやると感じまして、しかし、大変お忙しい方なので、ドタキャンになるのでは、とも思っていたんですが、本当にいらしてくださいました。『海筋肉王～バイキング～』や『スポーツマン No.1 決定戦』など、特番がたくさんある今週にお呼びしたのは間違いでございましたが、いらっしやってくださいました。樋口潮さんでいらっしやいます、どうぞ拍手をお願いいたします。(拍手)

(樋口) こんにちは。樋口と申します。よろしくお願いします。

(田中) よろしくお願ひします。実は樋口さんは、武田美保というシンクロの選手がうちの会社におりまして、彼女が『マッスルミュージカル』という、樋口さんの総合プロデュースをなされていらっしゃる所に出たことがきっかけで、何度かお会いさせていただいております。

まず一番最初にお伺ひしたいのが、『マッスルミュージカル』にしても、それから『筋肉番付』という、もともとTBS にご所属があったときにお始めになった、スポーツエンターテインメントという新しい分野、最初の、選手を使ってというか、スポーツを使ってエンターテインメントするという、そういった番組をお作りになったきっかけなどをちょっと。

(樋口) そうですね。じつは、僕も、運動少年でして、ずっとスポーツをやっている、就職するときも何かしらスポーツに関係する所に就職したいなと思っていて、たまたまテレビを見ていたり、プロ野球中継があったりとか、サッカー中継があって、大学生のときは、スキーとサーフィンをやっています、スキーも一生懸命やっています、サーフィンも結構真剣にやっています、大学 3 年のときぐらいにプロサーファーになろうかなとも思っています。

結構そういうことも考えながら、でもたぶん生計が立てられないだろうなというのも、別に考えて、スポーツ選手自体をやっていくのはちょっとやめようということで、そこから、スポーツに従事できる何かないかなということいろいろ探して、そのうちテレビ局も、そういう意味で、興味があって、ちょうど先輩が TBS の方において、それでお話をお伺ひして、その当時、『ザ・ベストテン』とか、いろいろ番組をやっているを見て、これはぜひひこのので、やってみようかなということをして、受けて合格をして。

それで最初スポーツに配属されると思っていたら、全然違う放送業務という、訳の分からないところに配属されて、ここが入ってみたら分かるんですけども、テレビも表側で番組を作る人たちと、それから放送を出す方たちもいらっちゃって、放送を出す側のシステムの方に回されて、そんなことは、もう当然分らずに入って、配属されたときに何だこれかと思っ、て、ちょうど当時その中が非常に厳しくて、外部の人を一切入れない、外部の人が入れない非常に厳しい場所なんですね。そういうところに配属されて、すぐ 3 カ月ぐらいでやめようかなと思っ、たんですね。

でも、いろいろ先輩方に、石の上にも 3 年じゃないけど、勉強をしてからちゃんと自分の行きたいところに行きなさいという話を受けて、何だかんだで 3 年がたって、それからやっと念願のスポーツの方に配属されて、当時一番最初はスポーツニュースの、今はないですけど、『ニュースの森』という夕方のニュース番組、その中のスポーツコーナーを担当していました。

そこで、いわゆるスポーツ中継の基礎とか、それからスポーツニュースの原稿の書き方とかルール、番組に携わる基礎をそこで初めて学んで、その後ちょっとしてから、ちょうど92年バルセロナオリンピックがあったんですね。バルセロナオリンピックは、当時はフィギアスケートの伊藤みどりさんが引退をされてから初めてリポーターで、テレビの仕事で携わることで、たまたま僕が伊藤みどりさんの担当ディレクターということで、バルセロナに 1 カ月半ずっと、いました。

その間、非常に勉強になる 1 カ月半があって、戻ってきたらプロ野球中継中に配属になるわけですね。そこで 1 年半ぐらいやったんですけども、だいたいテレビでスポーツ部に配属されると、ニュースと、それからプロ野球中継とか、それからイベントなどをおこない、一通り全部やったということになると、だいたい上の方を見ていると、営業に行ったり、ほかのセクションに行くことが多かったんですけども、僕はテレビ局に入ると、スポーツ部でスポーツのディレクターになって、プロデューサーになってということが目標だったので、ここで、またほかに行きたくないと思っ、て、何かいろいろ考えなきゃいけないということで、企画書と言われているものを、そこか

ら考え始めていろいろやりました。

いろいろ書いたんですけども、当時は、スポーツかバラエティーということで、2つしかなくて、当然スポーツ部にいると、スポーツ関係の企画書しか書けないということがありまして。でもやっぱりスポーツに携わっていると、スポーツもなにか演出のできるいろいろ仕掛けを、こちらで考えられないだろうか、と思って、じゃあ、どういう仕掛けを考えればいいんだろうということで考えたときに、純粋にスポーツ選手、各ジャンルの選手の運動能力がどのくらいあるんだろうという、企画書を書いたんです。

野球選手やサッカー選手の身体能力って、どっちがどうなんだろうとか、例えば跳躍能力はどっちが上なんだろうとか、足のスピードは実際どっちが速いんだろうとか、そういうのを本当に自分で純粋に知りたくなくて、じゃあ、それを確認できるというか、競わせる番組ができたらいいなということで考えたのが、『筋肉番付』のもです。

普通はサッカー選手だったら、サッカーのボールを使ってやるのが得意だし、野球選手だったら投げたり打ったりすることが得意だから、それぞれのジャンルのところでは競ってもしようがないということで、どういうふうに競わせたらいいかなということで、皆さんが、必ず大人になるまでに体験するであろう跳び箱とか、それから50メートル走とか、腕立て伏せとか、そういうので純粋に競い合ったら、もしかしたら身体能力が分かるんじゃないかなということで、興味本位の企画書を提出して。

ただ、企画書を提出したんですけど、テレビ局側は非常に昔で言う徒弟制度といいますか、制度がしっかりしていて、まったく企画書とか全然通らないんですよ。当時、今から13年ぐらい前なんですけれども、だいたい昔から有名なプロデューサーの方は、視聴率を取る、取らない関係なく、例えば土曜の12時はクイズとかですね、土曜の20時は、かつての『全員集合』もあつたんですけど、全部プロデューサーが決まっています。

そういう時代がずっと続いていて、ちょうどその意味で、皆さんがちょうどタイミングよく、限界がきている時期に僕がその企画を出して、ただ実績がなかったのが最初は見てもらえず、ほかにいろいろ出した企画書もまったく見ってもらえず、何でこんなに全然見てくれないのかと思っていました。

テレビには、編成というところがあって、そこがいろいろ、時間枠を、どういった企画を配置しようかということを決めるんですけども、そこに、なぜ何も通らないんですか？と交渉をしに行ったときに、僕が実績がないから、しかもスポーツ部って、運動部と言われていて、会社の中で一番地位が低いんだよということをはっきり言われて、当時はすごいショックを受けたんですけども、確かに実績がないというのは事実だったので、どういう番組でもいいから、1つずつ積み重ねていって、名前を覚えてもらえないということを言われて、いろいろスポーツに関係する番組をしました。がんがんしゃべって大丈夫ですか。

(田中) 全然しゃべってください。

(樋口) スポーツに関係する番組をいろいろやってきたんですが、それでたまたまふつと大きなチャンスというか、がありまして。プロ野球中継とかよく雨で中止になったりすることがあった時代で。今年は野球の人气がなくなって、ゴールデンタイムの中継がすごい減ったんですけども、やっぱり当時17年前ということで、野球がもう本当に王道中の王道で、だいたい巨人戦だけでも最低でも二十何パーセントという時代で。

ただ一方で、東京ドームみたいなのがまだなくて、ドーム型の球場がなくて、雨で中止になるケースが非常に多くて、TBSの場合だったら横浜スタジアム、横浜ベイスターズというのが関連会社になりましたけれど、当時は全然関係なくて、横浜スタジアムの巨人戦だけはTBSで中継できるのですが、雨で中止になることが非常に多くて、雨で試合が中止になってしまった時に代わりに放送できる予備の番組である2時間ぐらいのスペシャル番組というのを、シーズンが始まる前に作っておくんですよ。あくまで予備で。

その2時間番組を、1993年春に「樋口君、何でもいから作りなさい」と言われて、だいたい、そのころ、周囲

は、どうせ出ないだろうと思って、こういう番組制作は、手を抜いていたんですね。雨が降らなければオンエアされないわけですから。しかし、ボクはチャンスだなと思って、ちょうど 2 時間番組を、今は全然ないんですけど、プロ野球好珍プレーとかが凄く流行っていて、ちょっと変えた形でできないかなということをいろいろ考えて、萩本欽一さんという、今はゴールデンゴールズで野球のチームを持っていらっしゃるんですけども、業界内では大将と呼ばれているんですけども、欽ちゃんで野球という非常にアンマッチな感じが良いと思って。

当時は今みたいに萩本欽一さんと野球は、全然関連性がなかったんですけども、急に思いついて、電話を事務所にしたんですけども、当然かけて、まず向こうのリアクションが非常によくなくて、誰にかけてきているんだというようなリアクションをされたんですよ。実はテレビ業界ではルールがあって、あのぐらいのビートたけさんもそうなんですけども、超がつくくらい有名な人は、みなテレビ局で専属のプロデューサーがいるんですね。なので、「欽ちゃん番」というプロデューサーの方がいて。

(田中) 欽ちゃん番？

(樋口) 大将専門の、大将に何か話をするときには、必ずそのプロデューサーを通さなきゃいけないという、そういうルールがあるんですね。例えば今だと、ダウンタウンもいますし、吉本興業なんかは、もうだいたい決まっているんですけども、当時もっとそれがすごかったんですよ。

会社ではなくてプロデューサーが、そういう全特権を握っているみたいな時代があって、それを知らずに浅井企画って、現在は佐藤企画というところにろ大将は所属しているんですが、そこに連絡をして、後で急に全然知らないプロデューサーの人が来て、「樋口ってどいつだ」みたいなところから始まって、僕ですみたいな感じで、「お前、大将のところに電話したろ」みたいな話で、「はい、しました」と言うと、「お前はルールを何も分かっていないな」みたいなことを言われて。

(田中) それは、おいくつのときですか。

(樋口) それは、僕が 30 歳のときですね。僕は 1963 年生まれで、そのとき 1993 年ですから、30 歳のときです。そこから 1 時間ぐらい説教を受けて。ところが、たまたま萩本欽一さんが、レギュラー番組を一時的に全部やめていた後で、いくつかのレギュラーを持ち始めたところで、事務所にかけたら、大将のマネージャーがたまたま出て、萩本欽一さんにも話がすでに伝わってしまい、結構面白いんじゃないかということで会ってみようじゃないかという話になっちゃっていらしくて。

それがそのプロデューサーの人は相当気に入らなかつたらしくて、説教を受けたあげく最後は、でも取りあえず、大将が会ってみたいというので行こうという話になって、三軒茶屋の稽古場に行ってきました。萩本欽一さんというのは、すごい最初に会った人は、全然、何もしゃべらないで、しゃべらせるだけで、30 分近くずっと目だけを見ているんです。いろいろ企画の説明等をしてても他に見向きもしない。

僕は部屋に連れていかれて行ったんですけど。その後、僕の目を見ているんですけど、僕とは話さず、知っているプロデューサーの方に質問をしてということを繰り返して、1 時間ぐらいたったら、「分かった、これやろう」という話になって、「本当ですか、ありがとうございます」と言ったら、欽ちゃん番のプロデューサーがびっくりしちゃって、「ちょっと待ってください、大将。これ雨予備の企画で、雨が降らなかつたら出ないですよ」と。大将は「うん、出なくてもいいからやる」と言うんですよ。「本当ですか、本当にいいんですか」と言ったら、「うん、いい。彼が一生懸命思っていることがあって、やってみよう」という話になって、それでやることになって、収録も夏休みぐらいにやったんですけども。

それで TBS サイドも、毎年必ずだいたい中継が雨で 2 回、3 回は中止になるんですよ。だからいくら雨が降

らないと出ないといっても、出せる機会は当然あるだろうと。しかし、その年は雨で中止がなくて出なかったんですよ、本当に収録したものが。それで僕は当時、『欽ちゃんのプロ野球好珍プレーどこまで見せるの!?』というタイトルで作ったやつなんですけれども、出なくて、9月を切ったぐらいから、会社の編成の方々、それからプロデューサーの方々皆さんが大あらわになって、大将で収録をしておいて番組が出ないというのはあり得ないという話になって、それで、ちょうど10月のプロ野球中継が終わって、10月3日の日曜日、昼間の午後3時半から5時半の2時間の枠を番組のために開いて、そこで放送をしたんです。それが視聴率20%取っちゃったんですよ。

(田中) はっ、昼に？

(樋口) 昼の番組で。それもすごいついていて、当日、雨降れと思っていたら本当に雨が降って、それで本当に20%に乗っちゃって、その翌日ぐらいから大騒ぎになって、いったい誰が作ったんだという話になって、スポーツに変なやつがいてですねという話で、そういえばそいつ何か企画書いっぱい持ってきていたなみたいな話で、本当にそれこそ150は出したと思うんですけども、1993年だけで100種類以上出したと思うんですけど。それがやっと思ってもらえるようになって。当時暇だったので、毎日書いてたんです。

裏話ですけど、プロ野球中継枠に、毎日中継はやってないので、本当に年で20本ぐらいのゴールデン放送で、それ以外の日というのは、現場に行っている以外は会社で何もすることがないというか、しているふりをしなきゃいけないとかだったので、もうこうなれば書くしかないと思って、いっぱい毎日のように書いていたら、本当にもう150以上出して、そのうちの1つが『筋肉番付』のもとになる、ちょうどおととも放送した『スポーツマン No.1 決定戦』という番組の最初の企画書を、一番最初に見てもらって。

ただ、もっと言っちゃくと、同じ内容の企画を、タイトルを変えただけで書いて何回も出しているんですよ。それを僕は、これは絶対に当たると思い込んでいたので、タイトルがあまりにも良くないのかな、とかっていろいろ考えて、まさか見てくれないなんて考えもしなかったんで、タイトルが間違えているんだと、タイトルを手を替え品を替え何回も変えて出して、よく見るとたぶん企画書としては10種類ぐらいしかないという(笑)。タイトルは100種類ぐらい変えていますけど、それが目に留まって1993年の年末に、特番を放送というような経緯です。

長くなりましたけど、最初はまだもう言いましたように、最初は単純にいろいろなジャンルのスポーツ選手の身体能力が、どんなにすごいのかというのを、自分が本当に興味を持っただけです。それが『筋肉番付』、今もそんなんですけど、今も全部続いている、本当にうれしいなと思います。

(田中) いつも私、樋口さんのお話を伺うと、引き込まれちゃうんですけど、いつもそのときに習うのが、とても変な言葉かもしれないんですけど、すごく情熱ですよ。これでもか、これでもか、これでもか、これでもかという感じの、それはすごくとても大事だなと思って。

(重野) 引き込まれて聞いていました。

(田中) でしょう。

(重野) 先日の放送で、先ほどおっしゃった『スポーツマン No.1 決定戦』を見ていたんですね、テレビを。こんなに、くそまじめに真剣にやるというシーンを、要はテレビで撮られるということがあんまりないと、僕は見ていたんですね。当時お考えになっていたアスリートの能力の比較というところは、たぶんもうとっくにそこを超え

ているのかなと思ったんですけど、そのあたりの変化はいつから頃からなんですか。

(樋口) そうですね。スポーツとバラエティーとが融合されて、スポーツバラエティーという言葉ができて、『筋肉番付』がスタートしたのが1995年なんですよ。10年以上たっているんですけども。やっているうちに当然、今度はバラエティーチームがスポーツ選手をキャスティングをしたり、バラエティーチームがスポーツを一生懸命やってくるようにしてくると、もうほとんど飽和状態に今、なっているんですね。

そうすると、今度じゃあ、どっちの方向にいくかといったときに、やっぱりああいうバラエティー番組、テレビ番組なのに、本当に真剣にさせて、それをちょっとドキュメンタリータッチに取り上げたんですよ。行き着くところは、ある程度やれることはやっちゃって、正直ゴールデンタイムという枠で、ずっと視聴率も20%を取っていたので、今は各局皆さん若い人も含めて、20%いったらどうだとかを、ずっと繰り返し行っている。

テレビというのは結果が常に打ち続けているので、そこをちょっと超えてしまうと、一瞬目標を見失って、ですから二十何%を取るのが当たり前のことをずっとやってきたので、それが30%を超えたところで視聴率というものに対してですけども、目標が全然なくなっちゃって、目標がなくなった時期がちょっとあって、そのときに、その間に自分がテレビとかでどうしていいかみたいなことをやっているときに、TBSに在職時代に、ゲームの企画を出したりとか。

結局今、考えてみると、悪い意味で言うと原点を外れていってしまっ、何かどんどんどんマニアックな方に入ってくるというか、特にさっきも重野さんがおっしゃっていましたが、今の『スポーツマン No.1 決定戦』って、わりとフィジカルな戦いというより、実はメンタルな戦いを本気で戦わせてくれるようになっていっているんですね。

どっちかという、スポーツってそうなんですけど、肉体だけじゃなくて、やっぱり精神まで付いてこない、当然、その上には上がれないということなんですけども、僕は本当にトップに行く人と、それから超一流でもトップには行き着けない人との違いというのは、もう精神力しかないなと思っていて。

もしかすると、肉体的には金メダリストよりも、もっと上の人というのは、きっとたくさんいたんだろうな、だけどたぶん精神的なものが付いてこない、オリンピックに出られない人がいるのだろうなということをいろいろトップの人たちの近くにいると、それを感じていて。そういうのを別に、言葉にして番組をやる必要もないので、でもやっぱりそのメンタルな部分というのは、一番もしかしたらスポーツにも必要だし、社会にも必要なのかなと思っていて、そこを実は『スポーツマン No.1 決定戦』で、今はすごく突いているということなんです。

この前も見られた方は、どれぐらいいらっしゃるのか分からないんですけども、ちょうど跳び箱で、23段を跳ぶか跳ばないかという、あの池谷直樹君と知幸君というのは、ちょうど武田美保さんと一緒に『マッスルミュージカル』にずっと出ている2人で、舞台上でも跳び箱を跳んでいるんですけども、夏の終わりなんですけど、池谷君が本当に調子が悪くて、20段もやっと飛べるぐらいな感じで、(彼は世界記録保持者23段で、3メートル06センチなので、ここで言うと、もうあそこの壁より上だと思うんですけど。とても人間が跳ぶような高さじゃないんです)全く調子が上がってなくて池谷はだめだなと思っていました。一方、知幸というのがモデルから出てきて、『マッスルミュージカル』で今、結構わりとセンターに近い存在になってきていますけど、身長が高いことも有利ですが、跳び箱だけはものすごく練習をしているやつで、もうシアターでは23段跳べていたんですけど、シアターで飛んでいるから、その収録会場でそれを飛べるとはもう限らなくて。

もう1人ケータという愛称の片山敬太郎というのが『マッスルミュージカル』にいまして、彼なんかも23段を何回も跳んでいるんですけど、昨年絶好調のときに出したんですけど、やっぱり精神的にちょっと弱い部分があって、本番では21段しか跳べなかったんですね、すごい落ち込んでいたりして。

今回の『スポーツマン No.1 決定戦』では、明らかに知幸が勝ちだろうと、収録現場に携わっているスタッフも含めて思っているぐらい、知幸が楽勝で跳んでいって、池谷はぎりぎり、1 回失敗して、2 回目もぎりぎり成功するという形で22段まで到達したのですが、やっぱり追い詰められたときの人間って火事場の馬鹿力じゃないですけど、こんな跳躍をするので、こんな力が必要だというのは、僕はつい池谷直樹君に見せられて、誰しもが22段の2回目で知幸が先に飛んで、もう本当に人間として、ここまで窮地に追い込まれることはないんだろうなと思って、収録をしながらずっと見ていたんですけども。

それで22段の2回目で、当然それまでの跳躍を見ていると、もう跳べるような形ではまったくなかったんですけども、誰しもがもう跳べないと思っていて、僕もそこで横にいた実況のアナウンサーに、「世代交代」という言葉を言わせようと思って、紙も用意して出そうと思っていたら見事22段を跳んだんです。その瞬間に、やっぱり自分にはまだ分からないことがいっぱいあるんだなと思って、その瞬間に何か今までの僕の世界観がすべて壊されて、彼は、新しく22段が1つの分岐点で、結局最後、知幸が23段を楽勝で跳べるはずだったんですけど、彼が2回とも失敗をして、23段の2回目で池谷直樹が23段をクリアしたんです。

ちょうど池谷が前回23段を跳んだのは2002年の1月ですから、本当5年半ぶりぐらいですか。当時は27歳で今32歳ですから、それだけもう体力的にも限界を超えているはずなんですけども、肉体の限界はないのを感じましたし、あとは土壇場に追い込まれたときとか、苦しいときにどうやってそこを脱するかという人間が、そういう瞬間をそこで生で垣間見たので、そこがまさに精神力と言われるところの部分が、すごいクローズアップされたところだと思うんですけども。

(重野) いいですか、一言申し上げて。ずっとそうやってチャレンジしている方々が、すごい高いレベルで競い合っているという部分の精神性というのは、かつて、見てこられた一流のトップアスリートに近い精神面でしょうか。

(樋口) それもちろんありますし、あとは、そんなに運動力がない人でも、この番組に参加していると、その人間がやっぱり10段、11段と跳んでいくところというのは、これはそれぞれ人の壁の高さがあって、その人の能力の基準によって高さが変わるんですけども、そこをどうやって乗り越えていこうかという、一人一人の戦いなんですよ、自分との。

もちろんさっき話した池谷直樹君という人も、これは超トップアスリートなんですけど、一方では、普通の人もいます。前回では11段しか跳べませんでしたという人が、やっぱりすごくいろいろなトレーニングをしてきて、また現場に来て、自分の自己記録を更新して、12段を跳べましたといったときに、ものすごいやっぱり喜ぶんですね。

それは、その人それぞれの持っている1つの目標というか、それをクリアしたときには最大の喜びを心から表しているんですけども、そういうのを僕は現場で見ていると、すごいやっぱりうれしいんですよね。腕立て伏せとかも、結構3分間やったり。これなんかは努力をしている人としていない人が、もう明らかに分かると思うんですけど、やっぱり腕立て伏せをやっているとそうなんですけども、毎日努力をしていくと、確実に回数が上がっていくんです。

やっていない人は、いつまでたっても同じ回数しかできないという。もうだいたい『スポーツマン No.1 決定戦決定戦』で、年に芸能人は2回あるんですけど、だいたいもう腕立て伏せを見て、あまり回数が増えない人というのは、僕は次のときにキャスティングをしないんです。それはさっき申し上げた精神的な部分もだめだし、努力をしない人間は、僕は、基本的にたぶん売れもしないし、芸能人と言われている資格がないなというふうに思っちゃっているんで、最近のレースも見させていただいていると、腕立て伏せの回数が変わらなかった人は、次は出ていませんから(笑)。

(重野) 先ほどと繰り返しになるかもしれませんが、今『マッスルミュージカル』ではトップアスリートの人だった人とそうじゃないと人が融合してやっている部分があるなかで、樋口さんがプロデュースされるときにポイントとなる部分はこういったことでしょうか。

(樋口) そうですね。僕は、いろいろなジャンルとして入れているのは、やっぱり同じ系統の人がいると、やっぱり同じようなことしかできなくて、面白くもなくて、能力的にもでこぼこがあったりとか、ジャンルのにもでこぼこがあったりとか、僕はあえてバランスを取っているんですけども、それはミュージカル全体の構造的な部分も、そういうものも考えているんですけど。

一方では、入っている人間がどうあがいても、オリンピックに出た選手とタレントさんでは、明らかに違う能力が。でも僕は、あえて同じことをさせて、その中に入っていくに自分で目標を作って、その目標を超えるようにしているかという姿が、見えるか見えないかだけなんです。必ずちゃんと一生懸命それをやって、自分はここまでやれるようにしましょう、それができたら、また自分で目標を作ってやっていけるようにしましょうという人間は、やっぱり見えて輝いています、そのところだけなんです。

そもそも武田美保さんみたいなメダリストの人もいるし、片やもう全然、スポーツ選手として一流でない人もいる、一流にならなかった人。それはそれでお互いにリスペクトをできると思うんです。

やっぱりその組織の中にいたらトップアスリートとしてやる人間もいれば、その支える側の、サポートする側の仕事でトップに行く方もあるし、仕事という意味ではいろいろあると思うんです。その中で自分でやっぱり、これは俺は絶対に負けないんだというプライドを持って仕事なんかをやっていることが一番、そこが重要なんじゃないかなと思っていて。

それはよくメンバーに話したりとか、会社の部下たちに話したりするんですけども、何をもって1番かという、非常にあいまいというか、もしかしたら1番と思っている人がたぶん1番じゃないんじゃないかなという、1番にずっと一生いたいなとこだわり続けていても、1つの目標に対しての満足であって、目標というのは常に上にあるということで、人間は本来、本当に満足することはないんじゃないかなと、そういうふうに僕は思っています。

(重野) 個人的には、なぜアスリートに目を向けられたのかなということに、すごい興味があったんですね。私は体育大出身で、大学に入学するまでも体育の成績表を「5」でずっとやってきたような世界だったので、それだけでも体育ばかりやっていたような人間にとっては救いになるような大変ありがたいお話なのですが、一方でアスリートといわれるところまで到達し、それによって、狭い世界だけでも達成感を覚えてその後の自分の行き場がなくなる感じになっちゃっている人がいることを思ったときに『マッスルミュージカル』というのは、いろいろな過去を持つ人たちが合わさった空間ができるんですよ。どういう雰囲気になっているのかなー、いろいろな想像しちゃうんですよ。

(樋口) そうですね、選手的には目標がたぶん一緒になっていったような、いろいろなジャンルのやつが集まってきた、それこそ本当に肩書もいろいろ違う人がいるんですけども、最後はやっぱりお客さんが、だいたい1,200人ぐらいのお客さんが入るところなんですけども、そのお客さんが最後のエンディングで、本当に喜んでくれている姿、拍手をしてくれる姿を見て、みんなは自分は一生懸命やってよかったな、お客さんの盛り上げを目の前で見て、すごくうれしいなというような気持ちが、まず1つで、みんなが1つになっていくんじゃないかなと。それはだから、いろいろなアプローチがあって、そこにたどり着いた、同じ目標を分かち合っているところが1つの目的が、その時点での目標なのかなという気がしますし。

あとは、先ほどもお話されたように、体育でいった人って、たぶんさっきからお話しているような、目標とかそう

いうのはなく、才能がもちろんあって、もう自然にできちゃった。特にそれらは天才型の人と、努力型の人もいると思うんですけども、それですとトップでいって、そのままプロになったりとか、みたいなのがあると思うんですけど、そこであと、その先に今度どうにかなれるかということなんですけども、あとは、本当に自分自身に、自身の能力にどこでどう気付くかということが分からなくなっていますので、そこでもう仕事をぱっとやめちゃって、セカンドステップに行く人もそうだし。

俺は、このままやっぱりサッカーずっとやりたいんだということで、そこで気付いてもう1回フィジカル的に鍛え直して、ぼろぼろになるまでやる人もいるだろうし、それはその人なりの目標だと思うんですね。論議的に、ここで限界だと思って、じゃあ、セカンドステップも考えようというの、それも1つの考え方だし、ぼろぼろになってどうにもならなくなっちゃって、1回途方に暮れるというのが1つの考え方。途方に暮れるだけで、その先はどうすんだということが大きな問題だと思うんですけども、本当に人の考え方1つで、それを考えるのが、どの時期に考えられるかということだけだと思うんですね。

(重野) 1点だけ聞きたいことがあって。スポーツは真剣にやっていますという部分と、演出がいかに融合するのかが、すごい重要なポイントだと思っているんですね。死ぬ気で本気でやっている人たちと演出が組合わさったことを為さっているその先に樋口さんが今お考えになっているビジョンというか、どこをみていらっしゃるのかなというのを教えていただきたいなと。

(樋口) そうですね。今、さっき申しましたように、今まさに、そのおっしゃられたように、プロスポーツの方で一生懸命やっている方、アスリートで一生懸命やっている方も、演出でちょっと若干ずれちゃうところもあるわけですよ。こっちが持ち上げたい人と、それから、その競技では違う主役だったりとかということで、テレビ番組と実際の競技というのは、ちょっとやっぱり方向性がどうも違うと思うんですね。

やっぱりサッカー中継がある、日本代表の試合がある、野球もそうですけど。本当は4番バッターであったりとか、サッカーだと、いわゆる10番を着けている人が目立つと思うんですけど、これがテレビだと得てしてそうじゃない場合もあるというか。主役もまた主軸も変えたりするということがあって、それは何のためかという、やっぱり視聴率を取るためにやったりするんですけども。

さっきも途中で僕がお話をさせていただいたんですけども、その先には何があるかというのが自分でよく分からなくて、今はテレビの世界で言うと、ちょっとフィジカルな部分からメンタルな部分をちょっと攻めていて、そこに自分で分からなくなっている何かがあるのかという、それを探し始めているところですけども。

正直今、ちょっと重野さんから言われた答えというのも僕も分からなくて、そのプロスポーツ、もしくはアスリートとテレビ番組という、1つの切っても切れない2つの先にあるものというのは、今はどっちかという完全に、スポーツ雑誌の過剰なプロモーションになっちゃっているんですよ。

普通のところはやっぱり、普通のスポーツがスポーツ中継とかスポーツバラエティがあって、Jリーグがあって、プロ野球があって、そのトータルのバランスということになるんですけど。

(重野) 安心しました。たぶんそれなりに皆さん走っていると思うんですね。

(樋口) そうですね。

(重野) 全然まとめにはならないんですけども、非常にエッセンスをいただいたので、今日はよかったなと感じます。

(田中) すごいあっさりですね。もう1つだけ。いつも樋口さんぽい方には必ずインタビューでお伺いしているんですけど。樋口さんぽいって変な言い方ですけど。変な質問ですけど、なんでそんなに頑張っていますか。人生の意味というのは何ですか、樋口さんにとって。何でそんなに走っていますか、変化していますか。

(樋口) ずっと同じ生活をしているんだったら、頑張っていた方がいいかなと思うだけですね。何でしょうね、分からないですけど。

全然関係ない話なんですけど、このぐらいの年になってくるといのは変ですけど、やっぱり死ぬということが、私生活では考え始めるじゃないですか。そうするとやっぱりどうい生活をしていようが、結局死ぬんですよね。だったらやっぱり一生懸命やって、後悔しないと思っただけですけどね。僕なんか自分で一生懸命やっっているという、そんな意識もないんですね。なぜかという、やっぱり人に負けたくないというぐらいですね。その気持ちだけなんです。

(田中) やっぱり樋口さんでした。こういう質問を投げると、格好いい人ってすごいきれいな言葉を使うんですよ。例えば子供の教育のためなんですとか、日本の社会のためにどうたらと。もちろんそれは、本当のことでもあると思うんですけど。

樋口さん、いつも拝見をさせていただいていると、本当に生き急いでいる方だなと、いい意味なのか、いい意味に申し上げているんですけど、そう感じます。本当にいつも尊敬をしているのですが、今日特に私が響いたのが、本気という言葉がどんどんどんきてしまって、その本気というのが単純に何か優劣の本気ではなくて、その本気というのをやはり『マッスルミュージカル』で、色々な場面で拝見しました。一番そういえば見たんだなというのが、武田美保ちゃんが縁日の、あれは何ていうんだっけ。

(樋口) ヨーヨーですね。

(田中) ヨーヨーですね、パッコンパッコンという。あのヨーヨーができなくて、樋口さんができなくていいよ、別に美保ちゃんのパートじゃないから、武ちゃんはシンクロをやるメインの水の女王だしと。だけど、そのヨーヨーがどうしてもできなくて、たかがヨーヨーですよ。パッコンパッコンとやるやつですよ。あれを曲でやるんですよ。いろいろな場所にやったりとかして。あれをばかみたいに練習するわけです、武田は。悔しくてその役に外れたことが。

(樋口) はずれたというか、はずれていただいたんです。

(田中) ですよ。いらないよって、別にそれは悪い意味じゃなく、武ちゃんいいよと。そしたら非常に頭にきたというか、自分に悔しくて、やりだしたんですよ。それを毎日やっていたと、家で1人でやっていたと。あるときそのパートが全部できるようになったら、わざわざ樋口さんのところに、もう一度……

(樋口) 僕っていうか、演出家の人のところに行って、わざわざ夜終わった後に待っているんですよ。

(田中) 影で待つんですよ。

(樋口) 見てもらうためだけに、ずっと。

(田中) ばかですよ。

(樋口) あれがでもおかしくて。

(田中) それで見てもらって、その端役に入ったんですよ。あれを偶然、私がマッスルを見に行ったときに、何を練習してやれるようになったんだらうって。やった後に最後にぱんって終わったときに、ちょっとみたいな、顔がオリンピックのときの顔と同じように私は感じたんです。

やったという、すごい勝手に自信を持っていて、誰も別に何も見ていなくて、でもすごい自分でふんってすごいいい顔をして、あのときにぱーっと涙が出たんですね。たかがこういうことで、あんなにやる気になって、これが達成できたからって何も無いのに、それをやはりマッスルにやっていただいて、シンクロパフォーマーが、たかがこんなくだらないことで、何であんなに達成感になるんだらうというのは、やはりそれに対しての本気って、どのレベルでも関係ないんだなと。たかが、とあえて言いましたけど。ターゲットにすることは、べつにじつは何でも大事なことで。

(樋口) 本当に関係ないんです。でもそれがあるから、彼女はトップにいったと思いますね。彼女がオリンピックのメダルを目指していたという目標の持ち方が、今はたぶんヨーヨーができることなんですよ。

(田中) そうですよ。なので、それがエンターテインメントって、それもあるのかなとか、あるいは樋口さんがやはり『マッスルミュージカル』って、エンターテインメントの質とかという面では、いろいろなことを言われることがあると。だけど根本のその理由は、お客様にいかに楽しんでいただけるかということなので、自分は何を見せたいかじゃなく、何を楽しんでもらうかというものにしか視点を当てていないと。それも本気だなと思ったんですね。なので、すごく今日は本当にありがとうございました。

(樋口) いろいろな方がいらっちゃって、多少何か、これからお仕事をされていく上でも、プライベートでも参考になっていただけたらいいなと思います。また何かありましたら、機会があれば、いろいろ聞いていただければと。よろしく願いいたします。ありがとうございました。(拍手)

勉強会直後は、あまりの樋口さんのオーラと、話の情熱で、冷静に分析をできなかつたけれど。

ふと思ったことは、アスリートは、引退しても、ずっと熱くてもいいのだということ。

アスリート時代の結果自体が大事なのもなんでもなく、それまでの結果への執着した執念とか、熱い経緯が、引退後にも、様々な場面で利用できることであり、その「生き方」はどんなトランジションを経ようとも、普遍的なものであるのでは、と。

だから、なおさら、トランジション時には、「何も失っていないのではないかと」。

ふと、とても大きな仮説を立ててみた。

あらゆるアスリートのモチベーションの火を消さない土壌を作り続けていらっしゃる樋口さんは、本当にステキな方でした。

そして、本気という意味。

非常に考えさせられました。

ありがとうございました。

田中ウルヴェ京

---

## 樋口 潮 プロフィール

---

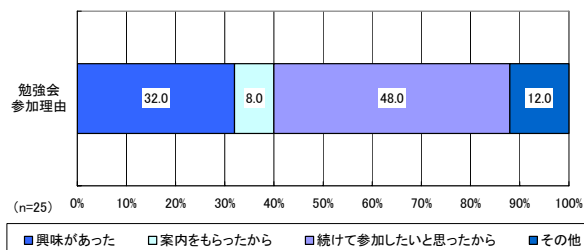
慶応義塾大学卒業後、1986年TBS（東京放送）入社。「筋肉番付」「スポーツマンNo.1決定戦」「世界陸上」「Zone」などのヒット番組を飛ばし、スポーツとエンターテインメントを融合させた“スポーツバラエティ”という新しいジャンルを創り上げる。2003年11月、TBS退社後もプロデューサーとして、スポーツバラエティ分野における多彩な番組を手がける一方、筋肉ミュージカルの発案者として、その誕生から進化までをプロデュース。2004年に横浜市の全面協力を得てマッスルシアターを落成。2006年、ラスベガス公演を成功させる。  
株式会社Monster9代表取締役・株式会社デジタルナイン代表取締役。

---

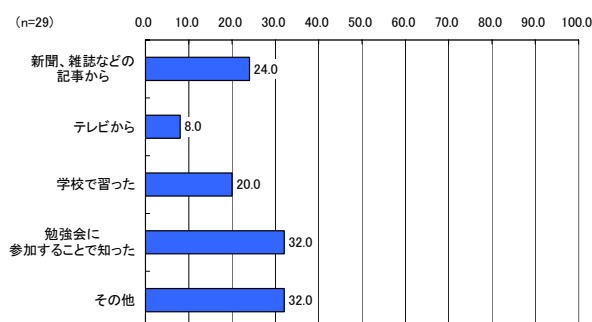
## 2. 第 17 回 アスリートのためのキャリア・トランジション勉強会 アンケート集計結果

アンケート総数:25

### 1. 勉強会参加理由



### 2. 興味、関心について



### 3. 勉強会はどうだったか。

- ・ メディアの 2 面性が知れました
- ・ 観て楽しむためのスポーツを通して、一人一人の目標設定の大切さを改めて考えさせられました。
- ・ 自分で目標を設定し、クリアすべく努力していくことが重要、という話を伺って、自分がアスリートだったときには出来ていたのに今出来ていないことだと思いました。「今」の生活で目標に「気づく」ということができず、そのまま動いていない自分をかえたい、と思いました。「何となく大学を出た人は何となく就職して何となく生きていける、でも一流のスポーツ選手にはその後がない。マッスルミュージカルはその人たちの第二の人生になる」というお話が印象的でした。マッスルミュージカルや No.1 決定戦を見てうらやましく思えるのは、彼らは第二の人生を見つけられて、自分を活かす道を見つけられたからなのだ、とわかりました。彼らの姿を見ていると、今の自分に焦りやふがいなさを感じます。ただ、マッスルミュージカルを終えた後、彼らはどうするのだろう、と思いました。
- ・ スポーツ選手のキャリアについて本気で取り組んでいる方の話を聞いてとても勇気が出ました、ありがとうございました。
- ・ おもしろかったです。いい刺激になりました。
- ・ 樋口さんのスポーツに対する純粋な気持ちが理解できた。テレビ界の演出にいかに関手のモチベーションに火をつけたかがわかった。樋口さんのシンプルでまっすぐな気持ちが伝わりました。
- ・ トップアスリートの中にあるそうではない人々の姿勢(リスペクトし、自らの目標を設定しクリアしていく)をすることができ、勉強になった。このことは日常生活でもありえることであり、自省すべきことでもあると感じた。
- ・ メディアとスポーツの切っても切れない関係を再認識しました。樋口氏もおっしゃっていた、セカンドステップ。しかし筋肉ミュージカルも他よりずっと短い間にトランジションを求められる世界です。その後の出演者たちがどのようなトランジションをなし得るのか興味があります。本日は貴重なお時間をありがとうございました。
- ・ スポーツバラエティというジャンルの面白さをはじめて知りました。研究してみる価値がありそうです。エンターテインメントという観点は深いですね。
- ・ お話を聞いていてすごく引き込まれていきました。人としての大切な部分に(本気でやる。何事にも目標を持って。等)重点をおいてスポーツバラエティを作り上げてきたのだなと・・・自分も頑張らなくてはいという気持ちにさせてもらいました。
- ・ 樋口さんの話されるすべてが本当におもしろく、とても勉強になりました。キャリアトランジションが広がるきっかけだと思えます。
- ・ 樋口さんの「まっすぐに」「あきらめない」姿勢が人を動かすのだな、と思いました。久々に「この人、すごいなあ」って思える人に会えました。見習いたいと思います。自分も「本気で」生きていこうと思いました。
- ・ キャスティングする上で、常に目標を持ってそれをクリアしていく姿を重要視しているという話が参考になった。
- ・ スポーツの価値、アスリートの価値をビジネスの世界にいかに関融合(?)のヒント頂けたと思います。
- ・ 初参加で、コテコテのキャリア・トランジションの誰かと思っていたら決してそうではありませんでした。「本気」など、スポーツを行う上での能力は、もしくは本能は、様々な分野で必須のことだと感じました。
- ・ スポーツに携わる人々から新たな動機や目的意識を引き出す、という意味で非常に参考になりました。
- ・ 非常に参考になりました。スポーツ選手であるなしに関わらず、津年意目標を改定してクリアしていく現実を、人生の中で持ち続けることが大切なんだなと感じることができました。そして、スポーツ選手、元スポーツ選

手にしかできない、能力(運動能力)を活かし、夢を与えることを改めて気づかせて頂いた気がします。人それぞれ自分にしかない能力で、人に夢を与えることが自分にもできればこれ以上のことはないなと思いました。

- ・ とても興味深く、エネルギーを頂きました。
- ・ 申し訳ありません。遅刻してしまい、あまり聞けませんでした。是非また参加させてください。
- ・ すごくひきこまれて、時間を忘れました。あまりにぼーっとして書くより感じていたかったので、記入はこのへんで…。どうもありがとうございました。
- ・ 対談方式ですが、机を2つよりも以前の丸テーブルに3人でトークされるほうが良いと思いました。
- ・ これまでとは毛色の違う方の登場だったので、「どんな話になるんだろう…」と少し疑問を持っていましたが、良かったです。
- ・ 筋肉ミュージカルが「セカンドキャリアの選択肢のひとつになれば」とおっしゃっていましたが、筋肉ミュージカルのメンバーがキャリアアランジョンについてどう処理しているか、また筋肉ミュージカルから更に他の分野へトランジットしていく方がいたならば、そうしたお話をうかがいたかったです。
- ・ とても面白いお話でした。一つの興味から、企画が生まれ、たくさんの人々に、感動をあたえたり、いろいろなドラマをつくることはすごいと思いました。
- ・ もう少し質問時間を設定してほしかった。カリスマプロデューサーならではの質問してみたいことが多くあった。今までのゲストより、カリスマプロデューサーに質問したいことが他の受講生もあったのでは。

#### 4. 日本のセカンドキャリア支援の現状

- ・ 教育のプログラムに導入したい(指導者)
- ・ まず、スポーツにたずさわっていない人(自分を含め)に「セカンドキャリア支援」という言葉や課題が伝わって来ないと感じます。
- ・ 企業アスリートの立場・状況は不安定だと思います。企業にとって競技への支援は結構負担のようで、出来るだけ縮小に向けて動いているように感じました。なのでセカンドキャリア支援には力を入れる余裕もないのではないのでしょうか。いかにスター選手を旬の時に広告として使えるか、といったように見えます。
- ・ 支援したい思いは広がっているが、現状システムはまだまだ足りない
- ・ 不十分だと思います。私は大学進学かプロバレーチームに進むか迷い、現在大学に通っていますが迷っているときに、プロに進んだ場合の現役引退後どのような選択肢があるのか知らなかったです。また就活を通してインテリジェンスやパソナなどがセカンドキャリア支援を開始したことを知った程度で、まだまだスポーツ選手が引退後の姿を明確にくっきりと思い描ける状況にないように思います。
- ・ 少しずつ良くなっていると思います。
- ・ 本来ならば一般の高校生レベルの人にも学んでもらいたいことだと思うが、現場がなかなか興味を持たない。どうしたらよいのでしょうか？
- ・ アスリート個々人の自己理解への支援が足りていないように思います。自分は他社からどのように見られており、どういった社会が自分のような人間を求めているのかというマッチングまでに時間も支援体制も少なすぎます。外国の学生アスリートと比べ、日本の学生アスリートは学生としてもアスリートとしても環境があまりに悪く宙ぶらりんです。
- ・ 研究はこれからです
- ・ 先日のプロ野球の高校生ドラフトが注目されましたが、入ってくる選手がいれば辞めざるを得ない人が必ずいます。Jリーグには重野さんのような方がいらっしゃいますが、プロ野球界は意識が低いままです。何とかしたいです。
- ・ まだまだ社会の理解が得られていない状態だと思う。
- ・ 本来は競技全体の土台を支えているはずの人々=トップではない層のアスリートに対する支援や選択肢が少ない・弱いことが非常に問題だと感じています
- ・ 元スポーツ選手という肩書きが必ずしもプラスに作用していないと思っています
- ・ キャリアアランジョンの考え方は、とても役に立つはずなのですが、まだまだ浸透していないように思っています。精神科の外来では、身の振り方などに悩む方で一杯です
- ・ 他国に比べてサポート体制があまり整っていないと思います。
- ・ 「有名になって、たくさんのお金を稼ぐスポーツ選手」という姿が子供に夢を与えていると今だに思っているスポーツビジネス関係者がいることに驚くことが最近ありました。”今、何をどう考えているか”を言葉できちり伝えられるアスリートこそが、子供に夢を与えられる人だと思っています。
- ・ 活躍される場は少ないと思いますが、テレビなどで放映されるととても注目をあびるので、もっともっと増えたらと思います。
- ・ まだまだキャリアアランジョンという言葉がアスリートさえ知らないのが日本です

#### 5. 今後の勉強会にて議論したいこと

- ・ 部活の監督など
- ・ アスリートからスポーツ以外の分野に進まれた方のお話を伺えたら、と思います。アスリートが個人的に契約している事務所(？のようなところ)でアスリートのマネジメントをしている方のお話伺ってみたいです。
- ・ キャリアについて、各スポーツ分野の様々な話がききたいです。
- ・ 各年代のキャリアプランニングの実際の姿を知りたい、中、高、大、企業クラブ、プロ・・・
- ・ 大学スポーツで活躍している現役アスリートが今、自分のトランジションをどのように考えているのか、日本人の例を取り上げていただきたく思います。
- ・ スポーツと福祉のつながりに興味があります。自分のスポーツのスキルを介護予防や生涯スポーツに生かしている人をよんで下さい。
- ・ 大学スポーツで活躍している現役アスリートが今、自分のトランジションをどのように考えているのか、日本人の例を取り上げていただきたく思います。
- ・ 今回の勉強会は正直、「こんな人の話を聞いてキャリアトランジションに関係あるの?」と思っていました。しかし、とても面白く聞きました。これからも多彩な分野から、いろいろな人を呼んでいただきたいです。
- ・ ぜひ Jリーグチェアマンの川淵三郎さんの話を聞いてみたい。Jリーグを立ち上げたときの苦労話や成功話など。
- ・ マイナースポーツ選手の仕事との関係よりもスポーツとビジネスのキャリアを平行して積んでの方の話
- ・ 前回のような現役アマチュアアスリートの話 or 今回のような、意外なプロフィールの方
- ・ 活躍されている、スポーツ選手の将来の考えを選手本人がどのように考えているのか知りたい。
- ・ スポーツではなく、武道系のキャリアトランジションを提案していただけたらと思います。武道は終わりがなく、“道”としてまっとうしていくため、キャリアトランジションの分野でどう考えていくか。

## 6. ご意見

- ・ 勉強会に参加をしますと毎回思うのですが、お話をうかがっているとスポーツ(アスリート)とは違う世界の私にも、通じるものが沢山あります。人として、誰もが経験するトランジションにも、考える機会となっていると思いますので、頑張ってください。
- ・ アスリートは競技を終えたら、TV などメディアにも取りあげられなかったり、その後が一般の人には見えなかったり、ということが多いため、“その後”をメディアで流すとか、セカンドキャリアを得るために試行錯誤する姿などを人々の前に出せばいいのではないのでしょうか。
- ・ いつもすばらしいゲストの方をありがとうございます。
- ・ 学生(大学・高校)時代に“気づき”が必要だと思います。
- ・ 大学で講義をしていただきたいです。日本の学生アスリートのつらい現状を踏まえたお話をいただければ私の周囲の悩みあぐねている仲間が救われるように思います。本当に個人的な要望で申し訳ありません・・・
- ・ 地道に、あきらめず、こういうことを続けていくしかないのでしょうかねえ。私も次回も参加させていただきたいので、またお知らせ下さい。
- ・ いまそこまで考える余裕がない。とにかく自分のキャリアをまず軌道に乗せることしか考えられない。ただ、これは地道な作業を根気よく続けていくことが重要だと思う、会社には、アスリートの土壌を理解してもらい、アスリートにはしっかりサポート、教育していく。このことがいつか社会に認知されていくと思います。このような勉強会もこれからぜひ続けてほしい。
- ・ 「セカンド」という単語を使わないのはどうですか？
- ・ 低年齢層にキャリアトランジションを紹介していくことが大いに大切だと思いますので、地域のスポーツ指導者を育てる場面でキャリアトランジションを取り入れていけたらと思う。

### 2006年10月6日 勉強会参加者(敬称略)

五十嵐久美子	石井 朗生	石井美恵子	石黒 雅広	石原 英樹	江口 桃子
大西 修一	岡本るみ子	久保 悠也	小林 祐子	鈴木 美帆	高峰 修
但野 秀信	但野 優子	野中 雅貴	濱野 太郎	増田 明	松井 貴之
松信 恵	深山 計	室田 真人	森 千晶	安田 春暁	安田 千晶
山下 修作	山本 宏明	横田昭二			

---

---

次回勉強会スケジュール

**第18回勉強会**

**2006年11月24日(金)18:30~20:00**

ゲスト

**萩原美樹子**(はぎわら みきこ) **氏**

株式会社ジャパンエナジー・CSR事業推進部  
早稲田大学女子バスケットボール部コーチ

テーマ

**「アスリートのキャリア・トランジション～内省のくりかえし～」**

場所

**ミズノエスポート**

---

---

事務局:株式会社MJコンテス

東京都港区白金台 4-5-7-205

TEL 03-3447-2890 FAX 03-3447-2893

田中ウルヴェ京

清水栄子 / 宮本 純

ご意見・ご質問などございましたら事務局までお問い合わせください。